公明新聞　2021年02月22日付　４面

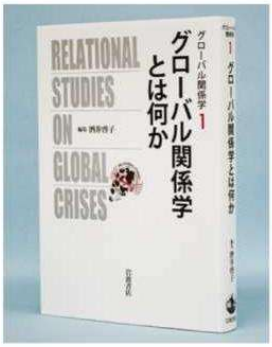
グローバル関係学とは何か

岩波書店
2600円

酒井　啓子 編

国家中心では「みえない」もの

本書はグローバル関係学（全七巻）の第一巻として、本叢書シリーズが掲げる「グローバル関係学」全体の枠組みと方法論を示す。本書の帯に「主語なき世界の関係を『みえる化』する」ことが本シリーズの目的とある。編集代表の酒井啓子は序章で、国際社会で生起するグローバルな問題を国家主体さえおさえておけばそれら問題を制御できるわけではない、つまり「国際政治が主体（特に国家主体）によって動かされている」という主体中心的な捉え方では現代のグローバルな危機を説明できないと指摘する。



本シリーズは主体中心主義を相対化し、関係中心主義を掲げて様々な出来事は様々な関係性が交錯する網状の世界から理解する必要があると訴える。従来の主体中心主義で「みえなかった／みなかった」ものが、人間の行為に加え、「非・人間」の作用をも分析視野に、様々な関係性、つまり関係中心主義に依拠し、分析することで「みえて」くるのだと述べる。これが本シリーズを貫く「グローバル関係学」の視座になる。

第一巻は七章から構成される。第四章までは「グローバル関係学」の枠組みを示し、残りの三章で「関係性」に基づく分析事例を論じる。第二巻以降は個別の事例を「関係学的に」分析した研究論文が掲載される。なお、第一章は酒井自身が執筆し、本叢書シリーズが目指す「国際関係学」の有効性を論じる。伝統的に政治学では合理的選択論を重視し、むしろ感情の分析を軽視してきたが、近年の国際政治を分析する上で感情の背景も含む「埋め込まれた関係性」の重要性を指摘する。

第二章では「通時的関係性」に着目し、複数の「みえていなかった」水流が重層的かつ状況的に錯綜して「グローバルな危機」が起きていることを示す。第三章以降も様々な関係性の観点から分析方法を示し、複雑化する現代の諸問題の本質を「みえる化」する。本書は国際政治における主体中心主義に一石を投じることで、新たな考察の道標を提示した点で興味深い。

◇

山田　満 評
早稲田大学教授

さかい・けいこ　１９５９年生まれ。千葉大学グローバル関係融合研究センター長。地域研究（イラク政治）。著書に『イラクとアメリカ』『フセイン・イラク政権の支配構造』等。

©公明新聞